

# 激化する豪雨と

## 戦う地域建設業

第11回建設トップランナーフォーラム②

豪雨による河川の洪水の現場で、地域の建設業はどう戦っているのか。五霞建設(茨城県)の菊地和幸社長が2015年9月に発生した関東・東北豪雨による鬼怒川洪水と宮戸川の災害復旧について報告した。また、新井組(岐阜県)の新井裕輔社長が、14年8月の高山豪雨で経験した、中山間地での河川氾濫と土砂流出への対応について話した。

15年9月、茨城県や栃木県などの上空に線状降水帯が発生した。これまで経験したことのない400mm以上の豪雨により、眠れないほどの音が一晩中続いた。「至る所で道路が冠水し、パトロールも困難な状況だった」と五霞建設の菊地社長は振り返った。

同社が担当した宮戸川の応急復旧では、決壊した堤防の幅が狭く、重機を搬入できなかったため、対

岸から大型クレーンを使い、鋼矢板で止水した。洗い、鋼矢板が不明で、矢板掘の深さが不明で、利点について菊地社長は

「状況や活動をリアルタイムで伝えることができる」「市民からの声を聞くことができる」「情報伝達ツールとして活用できる」ことなどを挙げた。一方、問題点として「マイナス情報の

命は、絶対に忘れてはならない」と強調した。

◆ ◆

東京23区に匹敵する広大な面積を有する岐阜県高山市。14年8月中旬、同市を記録的な豪雨が襲った。河

新井組の新井社長は、早期に仮設橋の架設を実現できた要因として「国と県市の行政間の連携がスムーズで、許可や資機材の無償提供、地権者への説明な

どが迅速に行われた」ことを挙げた。そして「災害対策本部に高山建設業協会から2人のリエゾンを派遣できたことで、リアルタイムに状況を把握できたことも大きかった」と強調した。



菊地和幸社長

場からの情報発信を試みた。市民からは「大変でしょうが、がんばってください」「本心に尊敬しています」といった声寄せられた。

菊地氏は「自分たちも被災者だが、地域で資材や技術を持って対応できるのは建設業しかない。この使



新井裕輔社長

新井氏は、孤立集落の住民から届いた感謝のメールを紹介しながら、「地域建設業の役割を再認識することができた。今後、社会資本が急速に老朽化するようになるが、延命化するための維持・修繕も重要な使命。地域建設業の誇りと役割を胸に刻み、地域活性化のためにも社会貢献していきたい」と決意を述べた。

### 河川洪水との戦い

## 誇りと使命感胸に行動